

武ちゃんと言話

小川未明

青空文庫

この夏休みに、武ちやんが、叔父さんの村へいったときのことであります。

ある日、村はずれまで散歩すると、そこに大きな屋敷があつて、お城かなどのよう、土塀がめぐらしてありました。そして、雨風にさらされて古くなつた門が、しめきつたままになつて、内には、人が住んでいるとは思われませんでした。

「どうしたんだらうか。」と、武ちやんは、不思議に思いました。門のすきまからのぞくと、家のほかに土蔵もあつたけれど、ところどころ壁板がはずれて、修繕するでもなく、竹林の下には、枯れ葉がうずたかくなつて、掃くものもないとみえました。あたりは、しんとして、ただすずめの鳴き声が、きこえるばかりです。

「この家の人は、どこへいったんだらう?」

武ちやんは、家へ帰ると、さつそくそのことを叔父さんにたずねたのであります。

「あの、大きな化け物屋敷みたいな家には、だれも住んでいないのですか。」と、いいました。叔父さんは、笑いながら、武ちやんの顔をこらんになつて、

「あんなどころまでいったのか。なるほど、一時は化け物も出るといいうわさがあつたよ。いい教訓になることだから、あの家の話をしてあげよう……。」と、叔父さんは、武

ちやんに、つぎのような話をしてくださいました。

それは、昔のことでありました。

正直な百姓が、いつものように、朝早く、野良へ仕事にいかうと、くわをかついで家を出たのであります。まだ、土がしめつていて、あまり人の通つたようすもありません。百姓が村はずれまでくると、なにか道の上に落ちています。

「なんだろう？」と、足を止めて、それを拾い上げました。なかなか重いのであります。包みを解いてみて、驚きました。重いのも道理で、袋に小判がたくさん入っていました。「だれが、このお金を落としたりろう。気がつかずにいってしまふとは、よくよく道を急いでいたとみえる。なんにしても気の毒なことだ。しかし、落とし主は、きつともどつてくるだろう。まだ、そう遠くへはいくまいから。」と、正直な百姓は、思いました。彼は、その包みを目につくように、道のそばの木の枝にかけておきました。そして、自分根のところへ腰を下ろして番をしていました。ところが、どうしたのか落とし主はもどつてきませんでした。

一日は過ぎ、また二日は過ぎました。けれど、街道を急いでくる、それらしい旅人

の姿は見えなかつたのです。彼は、毎日こうして仕事を休んで待つことに張り合いのないのを感じました。

ところが、三日めのことであります。一人の年老つた旅僧が、自分の前を通りかかりました。

「おお、このお坊さんにきいてみたら、あるいは手懸かりがあるかもしれない。」

ふと、こう思つたので、彼は、お坊さん呼び止めて、自分のこうして待つてゐるわけを話しました。なんとなく、徳高く見えたお坊さんは、百姓の話をだまつてきいていました。

「いままで待つてももどつてこないところをみると、おそらくその落とし主はもどつてこないだろう。そのお金は、おまえさんに授かつたのだ。おまえさんは、そのお金で田を開墾して、困つてゐる人たちを救つてやりなさるがいい。そうするほうが功德になります。」と、いいました。百姓は、お坊さんのいわれたことを正しいと感じましたから、お坊さんのいったとおりにしました。

百姓は、地主とはなつても、けつして、高い小作米を取ることはなかつたのです。自分分は、いつまでも昔の百姓で、みんなといつしよになつて働いて、みんなと苦楽を共にし

ましたから、村の人たちからも、恩人と慕われて、たいへん尊敬されたのであります。やがて、つぎの代となりました。いまの大きな屋敷は、この人の代に造られたものです。けれど、この人も、よく親の遺言を守つて、村のものをかわいがることを忘れませんでした。そして、やはり、自分は、田や、畑へ出て、みんなといっしょになつて働きました。この人の代も、また無事に過すことができたのであります。

三代めが後を継ぐようになってから、だいが考え方が変わりました。正直な百姓だった、祖父や、父親は、みんなといっしょに働くことを喜び、いいことがあればみんなとともに楽しみ、悲しいことがあれば、ともに苦しむというふうであつたのを、ばかげたことだと思ふようになりました。

「昔は昔、今は今だ。この大地主ともあろうものが、小作人といっしょに働くこともあるまい。」と、いいました。

二代めが、屋敷を構え、蔵を造つたのは、先祖の跡を後世に残す考えだったので。ところが、三代めになると、そんな考えはなく、ただ、遊んで暮らすことばかり考えていました。働くというのをきらつて、ぜいたくをしましたから、いつでも金が入用だったのです。したがつて、小作人には、やかましく年貢を取り立てるし、それでも足り

ないので、^{こうぎん}鉾山や、^{そうば}相場でもうけようとして、かえって、すっかり^{ざいさん}財産を失くしてしまい、^{いえ}家も、^{とち}土地も、^{ひとで}人手に^{わた}渡さなければならなくなりました。

「あの^{やしき}屋敷も、この^{あき}秋までに、^と取り壊してしまつて、^{あと}跡を^た田と^{はたけ}畠にしようかという話だ。いくら^{せんぞ}先祖が^{えら}偉くても、^{あと}後をつぐものに、そのりつぱな^{せいしん}精神がなければ、みんなこんなようになつてしまうのだ。」と、^{おじ}叔父さんは、おつしやいました。

^{たけ}武ちゃんは、^{おも}思いがけない、いい^{はなし}お話をきいたと、^{おじ}叔父さんに、^{れい}お礼をいつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 12」講談社

1977（昭和52）年10月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第5刷発行

底本の親本：「日本の子供」文昭社

1938（昭和13）年12月

※表題は底本では、「武《たけ》ちゃんと昔話《むかしばなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年9月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

武ちゃんと昔話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>